

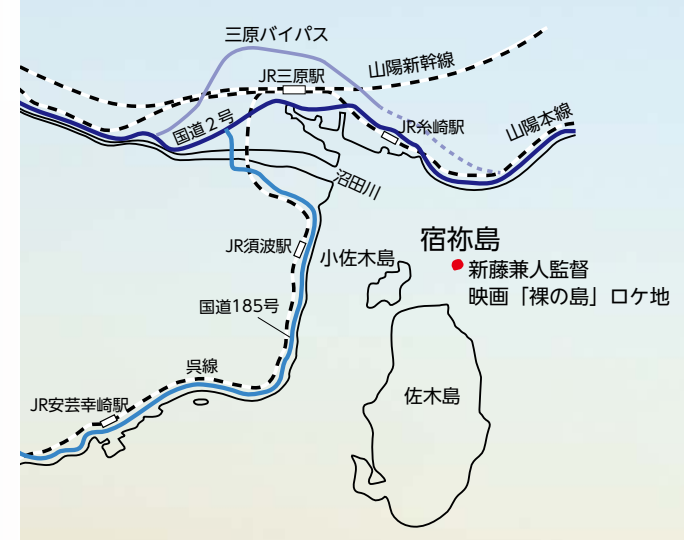
すべては、この島との 出会いから始まった。

今月号では、本市の名誉市民であり、国内で現役の映画監督として最高齢の新藤兼人監督を特集します。

監督は、昭和26年に「愛妻物語」でデビューし、本年の最新作「一枚のハガキ」まで、49作品を製作しました。

なかでも、昭和35年の「裸の島」は、本市の宿祢島^{すくねじま}を舞台とし、佐木島で合宿をしながら、撮影が行われました。この映画は、翌36年、モスクワ国際映画祭で最高賞を受賞しました。

その後も、本市で撮影を行い、平成15年に、三原市名誉市民の称号を得ました。この特集では、監督と本市との出会いや関わりを振り返りながら、監督が本市に寄せる思いを紹介します。



- しんどうかね と
新藤兼人(略歴)
- 明治45年 広島市佐伯区で生まれる
 - 昭和9年 京都・新興キネマの現像部で働き始める
 - 昭和19年 松竹大船撮影所の脚本部に移籍する
同年4月に召集され、呉海兵団に入隊する
 - 昭和25年 松竹を退社し、近代映画協会を設立する
 - 昭和26年 「愛妻物語」で監督となる
 - 昭和34年 「らくがき黒板」を三原市で製作する
 - 昭和35年 「裸の島」を三原市で製作する
 - 昭和36年 モスクワ国際映画祭で、「裸の島」が最高賞を受賞する
 - 昭和44年 「かげろう」を三原市で製作する
 - 平成9年 文化功労者に選ばれる
 - 平成12年 三原市で「三文役者」のロケを行う
 - 平成14年 文化勲章を受章する
 - 平成15年 三原市名誉市民の称号を得る
 - 平成23年 監督人生最後の作品「一枚のハガキ」を製作する
同年10月、菊池寛賞を受賞する





▲「らくがき黒板」での一場面



一歩ずつ前進

を通る漁船などに合図をしているとのこと。まさに、シナリオに書いたとおりの光景がそこにありました。裸の島は、この島しかないと感じました。監督と三原市がここに会いました。

昭和33年10月、裸の島の調査へ行った同僚が、映画の素材として「らくがき黒板」という小学校の実践記録を持って帰ってきました。これは、広島大学附属三原小学校で実際に行われていた教育の記録です。教室の黒板に相對して、後の壁に子どもたちの黒板を作り、



念願だった 裸の島を製作

らくがき黒板の撮影を終えた翌年の昭和35年1月、いよいよ裸の島の撮影を本格的に開始しました。スタッフは、監督を含めて13人。俳優は、殿山泰司さんと乙羽信子さんの二人のみという、記録的な少人数で撮影に臨みました。6月21日～8月7日の48日間、佐木島を拠点とし、民家4軒に合宿して撮影を行いました。

子どもたちに自由な意見発表をさせて、伸び伸びと教育しているというものです。もし、三原市でらくがき黒板の撮影ができれば、裸の島の製作の準備も進めることができると考え、らくがき黒板を映画化することにしました。らくがき黒板の撮影は、民家に泊まりながら行いました。広島大学附属三原小学校での撮影をはじめ、大藤酒造(当時西町)や沼田大橋、筆影山などでもロケを行いました。撮影が全て終了すると、ライトなどの機材を大藤酒造に預け、裸の島で使う予定のシーンなどを撮ったりしました。らくがき黒板の撮影が、裸の島の製作への確実な一歩となりました。



▲子役に選ばれた、田中伸二さん(当時鷺浦小4年・右)と堀本正紀さん(当時同小1年)

滞在中は天候にも恵まれ、日が昇れば撮影し、くたくたに疲れて眠るといいう日々の繰り返しでした。最後のカットを撮り終えたときには、急に力が抜けたような感じが襲われました。別れるときには、島の人たちが涙を流しながら見送ってくれました。温かい気持ちの交流が、いつの間にか撮影隊と島の人たちを結び付けていました。

島での生活は、隣人にさえも気を許すことのできない都会とは違い、伸び伸びとしたものでした。作品の中に出てくる子役は、地元の子どもに出演してもらうことにしました。選考の結果、田中伸二さんと堀本正紀さんを選びました。



三原との出会い

昭和32年春、仲間と一緒に広島へ行きました。せっかくの機会なので、瀬

後に、モスクワ国際映画祭で最高賞を受賞する「裸の島」のシナリオが、ここに誕生しました。昭和25年、製作の自由を求めて大手の映画会社を離れ、独立プロダクション近代映画協会(東京都港区)を立ち上げました。しかし、配給網を持たない個人集団では限界もあり、経済面では苦勞の連続でした。昭和30年に、一つのシナリオを書きました。せりふは一言もなく、最初から最後まで映像の組み立てだけで成り立つシナリオです。テーマは、人間の生きる赤裸々な姿。電灯もラジオもテレビもなく、水もない生活。小さな島に暮らす夫婦と子どもが、黙々と自然と闘う姿を描いています。監督の頭の中だけで、島を、人間を作って書きました。



自由を求め、独立

ここでは、新藤監督と三原市との出会いから現在に至るまでを紹介しています。戸内海を船で回ってみることにしました。イメージの赴くままに書いた、裸の島に似た島があるかもしれないと思ったからです。無人島をいくつか見て回りましたが、どれもシナリオのイメージに合う島ではありませんでした。諦めつつ、船を進めると、前方に、ぽっかりとおわんを伏せたような島が浮かんでいるのが見えました。既に日が暮れていたため、翌日、改めてその島を見に行くことにしました。



▲撮影当時の宿禰島。過酷な環境で農業を営む一家が描かれました

翌朝、船を借り、昨日見た島へ向かいました。島の名前は、宿禰島と分かりました。島へ上がり頂上へ行くと、小さな小屋に一人の男性が暮らしていました。電気もラジオも水道もなく、世間との接触も断たれています。緊急時は、島のでっぺんに旗を立て、付近



そして、今

平成6年、長年連れ添った、女優であり妻の乙羽信子さんが亡くなりました。その3年後、遺骨の半分を宿禰島の沖で、監督自らの手でまきました。一番因縁が深い場所、一区切り付けたという思いからの行動でした。そして今年、監督人生最後の作品である「一枚のハガキ」が完成しました。これは、監督の実体験を基にした戦争反対をテーマとする映画です。この物語の主人公は、佐木島出身という設定になっています。また、筆影山から撮影したシーンも登場します。監督人生最後の作品にも、本市は深く関わっているのです。



▲「一枚のハガキ」の中に登場するしまなみの景色は、筆影山から撮影されました

42年前の暑い夏が 昨日のこのようによみがえる

かげろうでチーフ助監督を担った 神山 征二郎監督



とにかく暑い夏でした。まだ27歳だった私は、突然チーフ助監督という重責を担うことになりました。かげろうは、新藤監督の作品としては珍しいサスペンスドラマで、50歳代後半の監督は、そのことを楽しんでいるように見えました。

大藤酒造の倉庫での撮影や犯人を追跡するシーンでの佐木島の灼熱など、42年前の夏が昨日のこのようによみがえります。



◎松竹



▲旧三番町公民館にてロケ隊との交流会



▲大藤酒造に組んだバーのセット



▲幸崎沖で撮影



▲撮影に協力した島の皆さんと一緒に



▲ロケ隊の仮設食堂
▼乙羽さん(左)が藻を採るシーン



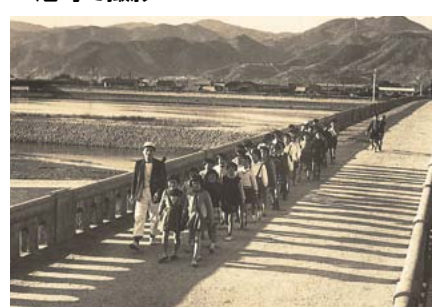
▲佐木港付近の町並み



▲ロケのようすを伝える鷺浦小学校の掲示板



▲港町で撮影



▲通行車両を止めて沼田大橋で撮影

ここでは、市内でロケを行なった3作品について、懐かしい市内の風景や当時のようすを写した写真を抜粋して掲載します。
また、それぞれの作品の製作に関わった人たちに、撮影時のエピソードなどを聞きました。

思い出ひもとく懐かしの名場面

ゆかりのある人たちのエピソードとともに



▲広島大学附属三原小学校で演じる児玉さん



▲三原港で撮影

まちぐるみで映画を作り上げた

かげろうで倉庫をロケ現場に提供した 大藤直也さん(74)(西町一丁目)

かげろうの撮影で、刑事部屋やバーのカウンターなどのセットを組む場所として、自宅の倉庫を提供しました。

監督は、鋭い感覚を持った人という印象でした。乙羽さんは、誰にでも気を使い、人との縁を大切にしていました。撮影が終わってからも、自宅を訪れてくれたくらいです。

行政も住民も一体となり、まちぐるみで映画を作り上げました。



家族で映画に出演 一番の思い出

かげろうで出演者の宿泊に協力した 新谷 千鶴子さん(75)(宮浦三丁目)

撮影に当たり、町内会が中心になり、宿泊場所の提供や炊き出しなどを行いました。自宅にも俳優さんが宿泊しました。

一番の思い出は、家族で映画に出演したことです。赤ん坊役として長男が、子役として長女が出演しました。さらに、私自身も長女を抱きかかえる役で出演し、とても良い思い出になりました。



裸の島の撮影で、乙羽さんが自宅に滞在した 堀本逸子さん(71)(新倉一丁目)

心に残ったのは 良い思い出ばかり

乙羽さんは、気さくな温かい人柄で親しくしてくださいました。スタッフの皆さんの熱心な仕事ぶりに、島の人も協力や惜しみませんでした。

10年ほど前に、監督が自宅に来られたとき、「ここへ来ると、まるで親戚へ帰ってきたように落ち着く」と言われていたことが心に残っています。

本当に、良い思い出ばかりが心に残りました。

我が子の出演 夢のよう

裸の島に、次男(正紀さん)が出演した 堀本節郎さん(90)、芳子さん(85)(鷺浦町)

次男が、子役として、裸の島に出演しました。走るのがとても速く、映画の中でも、段々畑を登ったり降りたりするシーンを撮影していました。映画にせりふがなかったため、出やすかったのかもしれません。

こんなにまで有名になった映画に、我が子が出るのでできることは、夢にも思いませんでした。



映画を通じて三原のまちを再発見

らくがき黒板で主役を演じた 児玉幸雄さん(64)(西町一丁目)

沼田大橋や筆影山など、市内の多くの場所で撮影したことや、俳優さんに演技を指導してもらったことが良い思い出です。

映画に出演して、三原のまちを再発見することができました。映像として見ると、いつもの景色が全然違って見えました。三原の町並みが、映像として残ったことは、貴重な財産だと思います。



市民の皆さんへのメッセージ

一步一步、歩こう。自分のために、 しっかりと生きるために。

5月19日に、新藤監督へのインタビューを行いました。

監督人生最後の作品として製作した「一枚のハガキ」に込められた思いや、映画を通じて伝えようとしていること、市民の皆さんへのメッセージなどを聞きました。

「一枚のハガキ」の完成、そして、99歳の誕生日おめでとございます——

4月22日に、99歳の誕生日を迎えました。誕生日には、一枚のハガキの俳優やスタッフのみんなが集まり祝ってくれました。長く映画を作ってきましたが、体力が衰えてしまい、これを最後に監督はやめようと考え、以前から作りたいと思っていた映画を製作しました。それが、一枚のハガキです。

インタビュー 新藤兼人

「一枚のハガキ」には、筆影山から撮影したシーンが使われているようですが、最後の作品に三原の風景を使った意図は——

一枚のハガキは、私の実体験を基にした、戦争反対をテーマとする映画です。主人公は、佐木島の出身という設定にしています。これは事実ではありませんが、佐木島は私にとって、一番なじみのある因縁の深い場所であることからそうしました。

また、裸の島や、らくがき黒板で、筆影山からの風景を何度も撮りました。瀬戸内海を見下ろすには、絶好のスポットだと思っています。

最初に三原で撮影を行なった「らくがき黒板」を映画化しようと思ったきっかけは——

当時、裸の島の映画を製作したいと思っていましたが、お金が必要で取り掛かることができませんでした。そこに、たまたま三原市で、面白い自由教育が実践されているということを知りました。指導している、広島大学附属三原小学校の青木先生と親しくなり、らくがき黒板を映画にして、利益を上げて、裸の島の製作につなげたいと考えました。

らくがき黒板は全国上映され、ある程度のお金が入り、裸の島の製作を行うことができるようになりました。

と思いました。それを映画という形で残しておこうと思い、一枚のハガキを製作しました。

最後に、三原市民の皆さんへメッセージをお願いします——

三原はとても懐かし、また行きたいと思っています。三原では、一步一步、楽しんで仕事をすることができました。

三原市民の皆さんも、自分のやりたいたった仕事に、真正面からぶつかっていただきたいと思います。困難が来ても避けるのではなく、一步一步近づいていってほしいです。

自分のために、しっかりと生きるために、一步一步、歩こう。

「裸の島」が、今でも普遍的に、世界中で上映されていることを誇りに思います——

裸の島を製作したときは、お金に余裕もなく、これが最後の映画になるかもしれないと思っていました。だから、撮りたいと思っていた映画を、本当に気楽に、面白く、悠々と撮影しました。撮影は、島に泊り込んで行いました。島には、雑貨屋が2軒あるだけで、自動車もオートバイもありません。昼に1時間ほど休んでいると、針が落ちても分かるくらい静かでした。そして、何より島の人たちが、本当に純朴でした。裸の島ができた土台は、島の風景そのものです。ゆっくりゆっくり段々畑を上がつて、水をかける。早く歩くのではない。だから、映画もゆっくりゆっくり流れていきます。

また、せりふのない映像だけの映画だったことで、外国の人でも日本人と同じような感覚で見ることができたのか



あとがき

以前、監督は本市を訪れた際に、次のように語っています。三原の海や山、川は、50年前と変わっていない。川は同じところを流れているし、海も美しいままだ。裸の島の撮影では、佐木島の方にお世話になりました。また、らくがき黒板やそのほかの映画でも、三原市民の皆さんには大変お世話になりました。私にとって三原市は、第二の故郷です——

この言葉の中には、本市の誇れるところや、これからも守り続けていかなければならないものが多く含まれています。自然の美しさに加え、監督の映画の背景には、市民の皆さんが支え、一緒にたって作り上げていった姿があります。

「豊かな自然と人情味あふれる気質」これこそ、本市ならではの特長ではないかと感じます。

監督の映画や言葉が、これからも受け継いでいくべき、変えてはならない三原市の財産を伝えてくれています。

取材協力

近代映画協会、神山プロダクション、市民映画祭開催実行委員会
掲載写真
近代映画協会、松竹、中野義孝さん、堀本逸子さん提供

特集 日本映画の巨匠・名誉市民 新藤兼人 —国内で現役最高齢の映画監督— 終わり。

みはら映画祭(市民映画祭)

新藤監督 最後の作品「一枚のハガキ」を含む4本を上映

ところ リージョンプラザ

▶3日(土)

- ①10時30分～ らくがき黒板
- ②13時30分～ 裸の島
- ③15時40分～ かげろう

入場料 無料

▶4日(日)

- ①10時30分～②13時30分～ 一枚のハガキ

入場料 大人1,200円(1,000円)、高校生以下無料

※()内は前売り料金。

※4日は13時10分から、新藤監督の次男 新藤次郎さんの舞台トークがあります。



販売場所 観光文化課、リージョンプラザ、中央公民館、芸術文化センター ポポロ、うきしろロビーほか

問い合わせ先 市民映画祭開催実行委員会(観光文化課内 ☎0848・67・6015)